

「ひと・もの・こと」の関わりを考えるフィールドワーク授業の試み

島津 俊之(和歌山大学教育学部地理学教室)

西川 恭矢(和歌山大学教育学部附属小学校)

橋爪 友美(和歌山大学教育学部附属小学校)

I はしがき

本稿は、和歌山大学教育学部の本(2024)年度「共同研究事業」に採択された標記の研究課題(課題番号 11)の報告である。応募申請書の「活動の概要」欄には、「大学教員・学生・附属小学校教員・公立小学校教員が協働して、「ひと・もの・こと」の関わりを考えるフィールドワーク授業の新たな可能性を探り、この共同研究チームを授業研究・教材研究の場として、そして学びの場として、インタラクティブに働かせてゆくことを目指す」と記されていた。これは、前(2023)年度の当該事業で「大学授業と小学校授業の双方に寄与しうる共同研究の在り方を模索した」(島津ほか 2024: 68)ことを引き継ぐ意図で書かれたものである。本年度の共同研究は島津を研究代表者とし、西川恭矢(和歌山大学教育学部附属小学校教諭)、橋爪友美(和歌山大学教育学部附属小学校教諭)、梅本竜馬(和歌山大学教育学部附属小学校特任教諭)、生駒真次(有田川町立藤並小学校教頭)、細田和希(和歌山市立雑賀小学校教諭)の5名が共同研究者として加わった。また、島津が和歌山大学教育学部の「教職実践演習」で指導する4回生6名(池田拓登・上保香果・垣本真子・山東 華・下垣琴海・林 和輝)が、フィールドワーク授業や研究授業に参加した。いずれも、初等教育コース小中連携プログラムに所属する社会科教育専攻の学生である。教職実践演習は教育職員免許法施行規則で定められた教員免許状取得のための必修科目であり、「教員として求められる知識の確認と定着、スキルの熟達化を促すとともに、豊かな教職意識の涵養を図る科目とされている(和歌山大学教育学部 2024: 20)。

実際には、当該年度における公(校)務の多忙化等の事情により、前年度に比べて共同研究の内実は限定的なものに留まった。また、狭義のフィールドワーク授業に加えて、児童の主體的な調べ学習や発言に重点を置いた附属小学校の社会科授業(4年生と6年生)への、上記4回生6名の参加を組み込む形となった。本稿は研究代表者が筆頭著者として執筆し、4回生が参加した授業の担当者である西川教諭(4年B組担任)と橋爪教諭(6年B組担任)を共著者として、共同研究者5名の確認を経て公表するものである。

II 共同研究の事実経過

本年度の応募申請書の提出期限が5月10日(金)であり、2週間前の4月26日(金)に附属小学校で最初の打合せを行った。出席者は島津・西川・橋爪・梅本・垣本の5名であり、共同研究の方向性について話し合った結果、標記の研究課題と「活動の概要」(I章参照)が記載された応募申請書が提出されることになった。

児童自身の主體的な発言や学びを重視する附属小学校の授業は、状況に応じて当初の授業計画を見直しつつ進められるのが常であり、フィールドワーク授業がいつどこで最終的に実施されるのか(あるいは実施されないのか)は、直前まで確定しないことも多い。また、小学校のフィールドワーク授業は特に児童の安心安全に配慮しなければならず、その実施は当日の天候や交通状況などの外部要因にも左右される。それゆえ、大学教員と学生が小学校のフィールドワーク授業に参加できるかどうかは、すなわち「メタフィールドワーク」(島津ほか 2020)を実施できるかどうかは、《運次第》という面がある。本年度に附属小学校側から連絡があったフィールドワーク授業のうち、大学側が参加できたものは2回に留まった。いずれも、西川教諭の「Change」(「総合的な学習の時間」の附属小学校での呼び名)における、紀ノ川左岸でのフィールドワーク授業である。西川教諭の本年度の「Change」では、《和歌山の命!? 和歌山の未来!? 川の大切さに迫る》という題材案のもとに、「身体を通して得た「実感のある知識」をつなぎ合い、ものの見方・感じ方・考え方・行動の仕方を磨き、すべての基盤としての「主體的な生き方」を育てていきたい」という目標が掲げられていた(西川 2024a)。2回にわたるフィールドワーク授業の現場は、紀ノ川の河口に近い北島橋南詰の上流側であり、潮の干満の影響を受ける感潮域に含まれ、カニ類やハゼ類などの多様な生物が観察できる場所であった(図1, 図2, 図3)。いずれも和歌山県立自然博物館の平嶋健太郎専門員が同行し、専門的見地から汽水域の多様な生物の生態について解説する「出前授業」として実施された(西川 2024b,c,d,e)。これは、和歌山県教育委員会が「子供たちの豊かな学び創り」のために創設した「エキスパート職員派遣事業」(和歌山県教育委員会 2025)によるものである。

6月6日(木)の午前中に、1回目のフィールドワーク授業が実施された。これは、西川教諭の「子どもたちが一括りにカニととらえているものの中にも多様な種類があること…その多様性を守る環境が和歌山にはあること」を実感してほしいという思い(西川 2024c)によるものであった。児童は西川教諭と保護者の方々の引率により、附属小学校から2km余りの道のりを徒歩で移動し、授業現場には9時30分過ぎに到着した。大学側の参加者は島津のみであり、

平嶋専門員とともに現地で合流したが、当日は2限（10時50分～12時20分）に別の大学授業（高校地歴免許の必修科目「社会地理学」）を担当する関係上、10時過ぎまでの参加となった。9時43分に撮影した写真（図2）から分かるように、当日はかなり潮が引いた状態で干潟が姿を現しており、生物の観察には好適なコンディションとなった。ちなみに、当日の和歌山駿潮所（和歌山市湊青岸）における干潮時刻は12時1分（干潮位2cm＝潮位表基準面上の値、以下同じ）であり、10時の潮位は41cmであった（気象庁2024）。児童は平嶋専門員による生物多様性の説明を聴きつつ、カニを中心とした干潟の生物の観察や採集に取り組んだ。島津は、児童の安心安全に気を配ることと、児童の話し相手ともなりつつフィールドにおける学びの現場を同時進行的に体験することを心掛けた。西川教諭は「子どもたちは、様々な種類の川の生き物に触れ、生き物の多様性を感じることができていた…授業者のねらいを超えて自分自身の生き方に目を向ける子どもの姿も見られた…実際にフィールドワークに出かけ五感を通した学びがあった」（西川2024c）と振り返っている。

10月2日（水）の午前中に、同じ場所で2回目のフィールドワーク授業が実施された。今回の授業目的は、「秋の川の生き物の様子を調査することで、前回と見つかる生き物が違うことに気付く、生き物の多様性を実感すること」（西川2024d）であった。大学側の参加者は、島津と教職実践演習の履修学生4名（垣本・山東・下垣・林）となった。また今回は、島津と学生4名が附属小学校4年B組の教室に出向いて児童と対面し、学生4名は紀ノ川の授業現場まで西川教諭や保護者の方々とともに児童を引率するという貴重な経験をするようになった。島津は現地で（再）合流し、学生4名とともに児童の生物観察や採集を手伝った。当日の干潮時刻は11時58分であったが、前回と異なって干潮位が58cmと高く、10時の潮位も91cmと前回より50cmも高くなっており（気象庁2024）、授業現場の干潟はかなり狭くなっていった（図3）。平嶋専門員の説明は、生物の多様性に加えて、潮の干満の要因や、潮位の差異による干潟の様子の違いにも触れる専門的な内容であった。以下に、児童のコメントを引用した西川教諭の振り返りの文章を掲げる（西川2024e）。

「6月の紀の川と10月の紀の川には、とても大きな違いがありました。…4センチほどのカニがほとんどで、何なら小さいカニを見つけるのが大変でした。でも今回はすごく小さなカニがたくさんいました。…季節によって住んでいる生き物の大きさが違うという大きな発見がありました。最後みんなで集まったときに平嶋先生がいろんな違いがあるのはどうしてだろう？またみんなで考えてみてね！と言っていました。私は水温度の違いが関係しているのかなと予想しています。みんなで話し合ってた平嶋さんに聞いてみたいです。」これは、紀ノ川での生き物観察を終えたT児のふり返りである。T児に限らず、多くの子どもたちが「6月と10月の川の変化」を実感していた。…同じ場所で生き物の様子を観察することで「違い」に気付く興味・関心を高めることができたことは、大きな学習の成果である…前回、川の生き物を飼うことの難しさを経験しているため「やっぱり、その生き物が住みやすいところってあると思うなー。このハゼは、学校では生きていけないと思う。紀ノ川で大きくなってほしい」とつぶやきながら、必死につかまえたハゼを川に返す決断をする子どもの姿も見られた。この子どもの決断は、川の学習を続けてきたからこそその姿であると考えられる。

フィールドワーク授業に参加した教職実践演習の履修学生は、次のようなコメントを残している（学生の氏名はイニシャルで示している。以下同じ）。

子どもたちが何より楽しそうで、目をキラキラさせながら活動していたことが印象的でした。…保護者も参加することができるようにすることで、安全に授業を進めることが出来るほか、普段の子どもの様子が気になって参加したという声からも、…保護者自身も子どもの成長を感じることが出来る、開かれた授業だと感じました。…最後に自分自身で自主的に授業を振り返る子どもの様子が見受けられ、総合学習に対する子どもたちの意欲や楽しい！という気持ちを感じました。また、育てられるかどうか？を問いかね、育てられる自信が無い子どもは海に返しに行く様子から、生物の命を尊重しようとする意思も見受けられ、生物に対する知識だけではなく、人間的な成長や課題発見力、授業を振り返る姿勢をつくることが出来ていることがすごいと思いました。（S.K.）

教職実践演習の履修学生には附属学校の研究授業への参加が義務付けられており、島津と履修学生5名（池田・上保・垣本・下垣・林）は、附属小学校の教育研究発表会における社会科授業にも参加した。ちなみに前年度の共同研究では、結果的に教育研究発表会における研究授業とその授業づくりへの参加が主眼となった（島津ほか2024）。教育研究発表会への参加は本年度も当初より念頭にあり、8月1日（木）には附属小学校で島津と垣本が参加して西川教諭と橋爪教諭の社会科授業について検討を行っていた。教育研究発表会の全体テーマは、前年度に続いて「生徒エージェンシーの発揮に向けた各教科からの接近」であった。生徒エージェンシー（student agency）とは、「現状を変えてゆくために、目標を設け、振り返りながら、責任をもって行動できる能力」（OECD 2019: 4）と定義される。この定義を踏まえ、附属小学校では生徒エージェンシーを「実現したい未来に向かって、周りを巻き込みながら行動に移していく能力」とする。研究授業では、児童が「与えられた課題を受動的にこなすのではなく、自分の興味や目標に基づいて学びの方向性を決め、自らの力で能動的にその教科の本質に向かう」ことを生徒エージェンシー発揮の初期段階ととらえ、これを実現するための授業づくりがめざされた（和歌山大学教育学部附属小学校2024a）。教育研究発表会での社会科授業の最終的な单元名は、橋爪教諭が「あの人とイシン伝心〜江戸時代を終わらせたものとは？〜」（6年B組、全15時間）、西川教諭が「災害とわたし—そのとき自分はどうか生きるのか？—」（4年B組、全16時間）となった（橋爪2024a; 西川2024g）。

11月2日（土）の教育研究発表会当日は、台風21号から変わった低気圧の影響で荒天が予想され、附属小学校では当

日 7 時に気象警報が出ていれば授業を中止し協議会のみ行うとされていた（和歌山大学教育学部附属小学校 2024b）。しかし、7時の時点で警報が出ていなかったため教育研究発表会は予定通り実施され、橋爪教諭の研究授業は9時50分～10時35分に行われた（図4）。学習指導要領の「我が国の歴史上の主な事象」（文部科学省 2017）に関連する、『260年間続いた江戸時代とその終焉』という大きなテーマを掲げた単元であり、単元内でのフィールドワークは実施されなかった。本時（第14時）の目標は「これまでの学習や調べ学習などで得た情報を基に、江戸時代のしくみや暮らしに関する資料等を活用しながら本時の問いについて話し合い、考えを深める」ことであり、「なぜ江戸幕府は滅んだのだろうか？」という問いに対して児童が意見を出し合う授業展開となった（橋爪 2024b）。

10時頃から風が強くなり、和歌山市内には10時22分に暴風警報が発表されたが、児童下校時の安全性を考慮して教育研究発表会は続行され、西川教諭の研究授業は10時45分～11時30分に実施された。学習指導要領の「自然災害から人々を守る活動」（文部科学省 2017）に関わる単元であり、児童は第10時に和歌山市消防局の「防災学習センター」（和歌山市 2025）での体験学習を経験していた。教室外での学びであり、これも広義のフィールドワークといえるが、西川教諭は「終始「笑顔」で体験に取り組んでいる姿が印象的であった…子どもたちにとって非日常の経験は楽しさにつながりやすい…アトラクション感覚で活動が進行される中で、なかなか現実の災害と結びつけることは難しい」と振り返っている（西川 2024h）。当日（第14時）は一転して、窓の外には暴風が吹き荒れ、通常なら休校になる特異な情況下で、『災害時に自分はどう生きるのか』を話し合う稀有な授業が展開することとなった。研究授業終了後、児童と学生には帰宅の措置が取られ、午後の協議会は教員関係者のみが参加して行われた。ちなみに13時18分には大雨警報が発表され、13時～14時の時間雨量は39mm、13時30分には最大風速16.4m/sを記録した（日本気象協会 2024；和歌山市 2024）。橋爪教諭と西川教諭の研究授業に参加した学生のコメントを、それぞれ以下に掲げる。

〔6年B組〕授業を通して、子供たちがそれぞれの根拠を持った話し合いが行われていたと思います。小学6年生と言うこともあって、各々が主体的に情報を集め、論理的な話し合いでした。授業では、江戸幕府が滅んだ理由について話し合っていました。江戸幕府の制度やしくみ、文化や経済、外交関係の視点から児童たちは話し合いを進めていました。その中で、江戸幕府が滅んだという事実だけに注目するのではなく、江戸幕府が長く続いた理由についてもふれている児童がいました。本時のめあてからは逸れていますが、各々の調べ学習の中で自分なりの問いを見つけることができています。また、現代の政治や社会と比較した発言をした児童もいました。比較することで、良し悪しだけでなく、時代の特色にも注目できる授業だったと感じました。教員の発言回数が少なかったのも印象的でした。児童主体の話し合いで授業を進められるのは、学級内での信頼関係がとても大切です。それに加えて、教員の一つ一つの発問の重要性も、今回の研究授業を通して学ぶことができました。（U.K.）

〔4年B組〕暴風警報が発令されている中で始まった授業でそのテーマが防災であった。西川先生は身の回りに起きていることと授業内容を上手に関連させて、授業に入れるような工夫を瞬時に考えて行っていた。また、授業の形態としては、前時までで各自で行ってきた一人学びの成果を発表し、そこから考えたことを基に学級全体で議論をするといったものであった。先生は議論の補助的な立場にたち、議論がそれてしまいそうな時には一度切り返すような発言を切り込んでいた。この入るタイミングが絶妙であると感じた。また、児童の発表の中には、一人学びの成果（事実）のみを発表し終わりそうな時があったが、このような場合には、そこからどのようなことを考えたのかを発言することができるようにアシストしていた。このことは、議論が進みやすくなると同時に、児童自身の学びを深めることにもつながっていると感じた。また、一人学びの質にも驚かされた。濱口梧陵の記念館にいてノートにまとめている児童や消防署に行き話を聞いたり、近所の方にインタビューをしたりしている児童など幅広い調査方法を用いて一人学びをしていた。また、教室の壁に一人学びの成果がまとめられているポスターが一面に貼られていて驚いた。中には、5枚以上の紙にまとめている児童もいた。このように研究授業当日のみではなく、前時までの過程の綿密さからも学ぶことがあった。（H.K.）

〔6年B組と4年B組〕児童主体の授業にするために教師があまり話さず、児童の発言中心に授業を行うことは非常に難しいと思った。児童から予想外の発問や意見が出て、教師の予定通りに授業が進まないからである。少しくらいだったら教師が発言をして、話し合いの整理をしても良いと思う。（I.T.）

共同研究の最終の打合せは、12月25日（水）に附属小学校で行われた。島津・西川・橋爪・垣本が参加し、今回の共同研究の振り返りと、報告書の執筆と成果報告会での口頭発表についての調整を行った。2月8日（土）に開催予定の「2024年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告会」では、西川教諭と橋爪教諭が口頭発表を行う予定である。

Ⅲ 若干の考察：共同研究の成果と課題

本年度の共同研究は、①「ひと・もの・こと」の関わりを考えるフィールドワーク授業の新たな可能性を探り、②共同研究チームを授業研究・教材研究の場として、そして学びの場として、インタラクティブに働かせてゆく、という二つの目的で始められた。現時点で、これらの目的がどの程度達成されたかを振り返ると、①については諸般の事情により、附属小学校のフィールドワーク授業づくりに対する大学側の寄与は、前年度（島津ほか 2024）に比べるとごく僅かであったといわざるをえない。寄与があるとすれば、それは事後的なものであり、その一つは、前章で掲げた学生たちのフィードバック（コメント）ということになろう。これに島津のコメントを付け加えるならば、西川教諭も橋爪教諭も、それぞれの社会科の授業構想の中で「ひと・もの・こと」の在り方に意識を向けていた。西川（2024f）は「理

想としては、子どもたちが日常生活で関わるヒト・モノ・コトから学習を展開するようにしたい」と書き、橋爪(2024a)は「歴史学習においては、本物の『人・こと・もの』に出会うことは難しい」としつつも、「歴史上の人物や出来事、物事」に「自分なりの視点からどっぷりのめり込むことはできる」として、「のめり込める『人・こと・もの』との出会い」を歴史(江戸時代)の授業づくりの出発点としていた。また、西川教諭の紀ノ川のフィールドワーク授業でも、平嶋専門員や大学側の参加者という「ひと」、紀ノ川と干潟に生息する多様な生き物という「もの」、潮の干満に由来する環境の変化や平嶋専門員の解説という「こと」が、児童の眼前に展開し直観に訴える「ひと・もの・こと」の複合体として学びに様々な形で関与してゆく可能性が見て取れた。この点で、今回の共同研究においては、「ひと・もの・こと」の関わり合いを児童に直接・間接に体験させる手立てを工夫してゆくことが、児童の《主体的・対話的で深い学び》の出発点になりうるという認識を共有できたと考える。「ひと・こと・もの」との直接・間接の遭遇を、フィールドワーク授業や社会科授業の起点とすることの意義を共有できたことは、今回の共同研究における一つの寄与といえよう。またこのことは、Ⅱ章で触れた《生徒エージェンシー発揮》の考え方も密接に関わっている。「鍛えることができるし、学ぶこともできる」(OECD 2019: 4)とされる生徒エージェンシーは、初等教育段階では《児童エージェンシー》として、生徒エージェンシーの萌芽形態と位置付けるほうが良いとも思われる。この観点からみると、紀ノ川でのフィールドワーク授業でも附属小学校社会科の研究授業でも、様々な面で児童エージェンシーの発揮がみられたといえよう。ただし、エージェンシーの発揮とは、エージェンシーの育成と切り離すことができない「学びのプロセス」(OECD 2019: 5)なのであり、その学びの場を適切にデザインすることは教師の重要な役割である。学びの場や学びのプロセスを、教師・児童(生徒)・保護者・地域コミュニティが協同して構築・支援してゆく能力は「協同エージェンシー (coagency)」(OECD 2019: 7)と呼ばれるが、保護者や博物館学芸員や大学関係者が参加した紀ノ川左岸でのフィールドワーク授業では、まさにこうした協同エージェンシーの萌芽がみられたといえるのではないだろうか。

②の「共同研究チームを授業研究・教材研究の場として、そして学びの場として、インタラクティブに働かせてゆく」という目的に関しては、島津が担当する大学授業(教職実践演習)にとって大きなメリットがあったことや、何よりも履修学生6名にとって大きな学びの機会になったことで、一定程度は達成されたといえる。Ⅱ章で引用したコメントからわかるように、学生はフィールドワーク授業や研究授業への参加から多くのことを学んだ。以下に、前年度と本年度の2回にわたり共同研究に参加した学生のコメントを掲げる。

共同研究事業には2回にわたり参加させていただいた。昨年は大学の講義である「郷土学習の理論と歴史」の授業の一環として参加し、小学生のフィールドワークの現場に立ち会うことで、児童がどのような学びをしているのかを自身も体験しながら学ぶことができた。今年は、フィールドワークへの参加に加えて、大学の教員と附属小学校教員の方との打ち合わせや話し合いにも定期的に参加させていただいた。そこでは、児童の実態を丁寧にみとり、児童の興味・関心に沿って地域教材や人との出会いに繋げていく(自然と繋がっていく)様子を目の当たりにし、授業を構想する際の教師の視点についてリアルタイムで学ぶことができた。研究授業を通して学んだことはたくさんあるが、特に勉強になったと感じたのは、『子どもの思考を促進させ、発表を活発にさせる工夫』についてである。…「先生は演者である」という言葉をよく耳にするが、ただ共感するのではなく、共感しつつも、時には、あえて子どもたちにとって予想外なことを言ってみるというのも子どもの思考を促進させ、発表を活発にさせる一つの工夫であるということを知った。…このような高度な実践に学生のうちに出会い、教師と児童の両方の視点から学ぶことができたことは、非常に貴重な経験であった。この経験や学びを活かし、私が教員になった時には何ができるのかということこれから更に考えていきたいと思う。(K.M.)

教職実践演習の履修学生6名は、今回の共同研究への参加で得た経験と学びを生かして、2025年2月10日(月)の模擬授業発表会をめざして小学校社会科の学習指導案づくりに共同で取り組んでいる。12月19日(木)に当該の学習指導案の内容を学生とともに検討したが、その時点で学生から提出されたのは、学習指導要領の5年生社会における「我が国の工業生産」(文部科学省 2017)に関連して、「花王エコラボミュージアム」での見学(フィールドワーク)を想定した事前学習の指導案であった。花王エコラボミュージアムは花王株式会社和歌山工場内(和歌山市湊 1334)にあり、小学校3年生と5年生向けの社会科見学プログラムが用意されている(花王株式会社 2019)。ちなみに島津は、10月30日(水)に教職実践演習を含む複数授業の履修学生を引率して花王エコラボミュージアムを訪れている。前述の指導案は、直接にはこの見学体験に触発されたものであったが、一方で学生は附属小学校の《主体的・対話的で深い学び》の授業実践への参加経験をも手掛かりとしつつ、児童が主体的に発言し行動して自らの学びに向かうために、教師がどのように介入し、花王エコラボミュージアムの「ひと・もの・こと」をどのように動員すれば良いのか、試行錯誤しつつ考えを巡らせている。模擬授業発表会のリハーサルは1月16日(水)に行われる予定で、学生たちの成長が楽しみである。

[引用文献・ウェブサイト] ※ウェブサイトは全て 2025 年 1 月 3 日最終閲覧

花王株式会社 2019. 花王工場見学プログラムのご案内. https://www.kao.com/content/dam/sites/kao/www-kao.com/jp/ja/corporate/about/pdf/factories_19_001.pdf

気象庁 2024. 推算潮位(毎時・満干潮)和歌山. https://www.data.jma.go.jp/kaiyou/data/db/tide/suisan/pdf_hourly/2024/WY.pdf

国土地理院 2025. 地理院地図(電子国土 Web). <https://maps.gsi.go.jp/#18/34.242181/135.167173/&ls=seamlessphoto&disp=1&lcd=seamlessphoto&vs=c0g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>

島津俊之・三品英憲・山本彩朱 2020. 小学校授業と大学授業の協同に基づく「メタ授業」と「メタフィールドワーク」の開発. 和歌山大学クロスカル教育機構教育・地域支援部門・和歌山大学教育学部編『2019 年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書』52-57. <https://doi.org/10.19002/wadaikzsh.2019.52>

島津俊之・西川恭矢・橋爪友美・福井規之・生駒真次 2024. 児童の市民性育成をめざした地域教材の開発と授業実践. 和歌山大学教育学部教職実践支援ユニット編『2023 年度和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書』68-73. <http://dx.doi.org/10.19002/wadaikzsh.2023.68>

西川恭矢 2024a. 令和 6 年度 4 年 B 組 CHANGE 年間指導計画(案)計画カリキュラム&実施カリキュラム.

西川恭矢 2024b. エキスパート職員派遣要請書 (2024/5/29).

西川恭矢 2024c. エキスパート職員派遣事業報告書 (2024/6/7).

西川恭矢 2024d. エキスパート職員派遣要請書 (2024/10/2).

西川恭矢 2024e. エキスパート職員派遣事業報告書 (2024/10/2).

西川恭矢 2024f. 社会科の本質「社会的事象を多角的に捉える」について.

西川恭矢 2024g. 災害とわたしーそのとき自分はどう生きるのか?ー. 和歌山大学教育学部附属小学校編『2024 年度教育研究発表会要項 生徒エージェンシーの発揮に向けた各教科からの接近(2 年次)』

西川恭矢 2024h. 災害とわたしーそのとき自分はどう生きるのか?ー. 和歌山大学教育学部附属小学校教育研究発表会 2024 当日資料.

日本気象協会 2024. 和歌山(ワカヤマ)のアメダス(2024 年 11 月 02 日). <https://tenki.jp/past/2024/11/02/amedas/6/33/65042.html>

橋爪友美 2024a. あのひととイシン伝心〜江戸時代を終わらせたものとは?〜. 和歌山大学教育学部附属小学校編『2024 年度教育研究発表会要項 生徒エージェンシーの発揮に向けた各教科からの接近(2 年次)』

橋爪友美 2024b. あのひととイシン伝心〜江戸時代を終わらせたものとは?〜. 和歌山大学教育学部附属小学校教育研究発表会 2024 当日資料.

文部科学省 2017. 『小学校学習指導要領(平成 29 年告示)解説 社会編』

和歌山県教育委員会 2025. エキスパート職員派遣事業. <https://www.pref.wakayama.lg.jp/prefg/500100/shokuin/expertshokuin/expertshokuin.html>

和歌山市 2024. 大雨警報に伴う本市の状況について(最終報). https://www.city.wakayama.wakayama.jp/_res/projects/default_project/_page_001/060/334/20241102-4.pdf

和歌山市 2025. 和歌山市消防局防災学習センター. https://www.city.wakayama.wakayama.jp/syoubou/bousai_gakusyu/1000182/index.html

和歌山大学教育学部 2024. 『和歌山大学教育学部 76 期(2024 年度入学)履修手引』

和歌山大学教育学部附属小学校 2024a. 『2024 年度教育研究発表会要項 生徒エージェンシーの発揮に向けた各教科からの接近(2 年次)』

和歌山大学教育学部附属小学校 2024b. 研究発表会当日警報発表時の対応. <https://www.aes.wakayama-u.ac.jp/news/news-6750/>

OECD 2019. *Student agency for 2030*. https://www.oecd.org/content/dam/oecd/en/about/projects/edu/education-2040/concept-notes/Student_Agency_for_2030_concept_note.pdf



図 1 紀ノ川左岸(北島橋付近)のフィールドワーク授業現場の空中写真(国土地理院(2025)に加筆)



図2 附属小学校4年B組の紀ノ川左岸（北島橋付近）でのフィールドワーク授業（2024年6月6日 島津俊之撮影）



図3 附属小学校4年B組の紀ノ川左岸（北島橋付近）でのフィールドワーク授業（2024年10月2日 島津俊之撮影）



図4 附属小学校教育研究発表会における6年B組「社会」の授業風景（2024年11月2日 島津俊之撮影）